

# 日本舞踊における「白」の本質とその意味 — 一拍子に見る「白」の意味するもの —

日本大学 小林直弥

## 「白」の概念

舞踊芸術には、実に様々な色彩が多用されている。特に日本の伝統芸能、とりわけ「能楽」「歌舞伎」、そして舞踊芸術としての「日本舞踊」には、化粧を含む扮装から、大道具や小道具、そして照明効果に至るまで、舞台の隅々まで日本人独自の湿感を中心とした草花等の色彩が駆使されている。また「色」は、「季節」や「寒暖」、そして「善悪」を代表とする舞台上に立つ役柄の性格までも表現できるのである。この「色彩」の内、「白」という色彩は、日本人の色彩感覚に照らし合わせ考えてみると、他の色彩にくらべ、特別の意味を持つことが理解できる。「潔白」や「明白」といった清潔なイメージからもそれは想像でき、日本全国に伝承される民俗芸能、また、歌舞伎、日本舞踊にも、演者が顔を白く塗る風習があり、これは「面白い」という言葉に繋がる。さらに「面白い」とは、「面白し」とも言い、顔が白いという意味だが、なぜ顔が白いと、「興味をひく」や「滑稽」という意味で使われるのだろうか。白川静著『字訓』（※1）には、「面白し」本来の意味を、霊の復活の祭礼に用いた言葉とあろうという説を紹介しているが、実はその霊の復活に深く関わるのが、日本の舞踊文化発生に多大な影響を与える「天宇受売命」を始祖とする「猿女君」の巫女集団であり、後の「七道者」の内の「白拍子」なのである。よって、日本の伝統芸能の中における「白」の意味と本質を調べた結果、「白」という色彩には、その舞踊文化発生における重要な意味を持ち合わせていることが浮き彫りにされてきた。そこで今回の研究発表となった次第である。

## 「白」と「素」との同義性

そもそも「白」というじは「ハク」とも「シロ」と読むことができる。が、実は、この文字はその読み方によって、その意味が微妙に違ってくる。「白（ハク）」は、そもそも髑髏の形を表し、その色を表した漢字である。このことから考えると、「白（ハク）」は、「死＝清潔・潔白」を意味する言葉であることが理解できる。また、我が国における人間の地位を色によって区別した推古天皇（六〇三）の「冠位十二階」では、「白」は忠義の意味を表す。これは、白骨となった人間には、嘘はないということにも繋がっている。さらに、我が国の精神世界に大きな影響力をもつ「陰陽五行説」においては、西の方位を意味し、「金」性

の氣がある。そして季節は「秋」である。これに対し「白（シロ）」には「素（シロ）」と同じような意味合いを持っている。『古事記』（※2）に登場する「稲羽の素兎」は、「シロウサギ」と読み、ここで言う「素」とは、毛を剥がされ、体に何も纏うものがなく、裸の状態であるという意味がある。また、『日本書紀』（※3）の神代上・第七段には、天照大神が「天石窟」に籠ってしまった折に天兒屋命と、太玉命が「白和幣（シロニキテ）」を懸でて、という記述があり、「白和幣」とは、神の召す衣を意味する。また、この衣を織ることは巫女の仕事であった（※3）ことから考えると、「白」は神を表す意味であり、それに仕えたシャーマンとしての巫女、「天宇受売命」との関係も深いことが推察できるのである。また、「素」は、「白色」を意味する言葉であり、かつ飾り気のないそのままの姿を現す言葉でもある。日本の舞踊文化発生に大きな影響を持つ「白拍子」の語源が、もとは声明（しょうみょう）の一つの拍子であった、アクセントのない平板な拍子のことや、管絃の伴奏なしで歌うこと（素謡）を指すことから考えると、「素」と「白」は、同じ意味を持ち、かつ「白拍子」は、「素拍子」とも言えないだろうか。また、こうした考え方から、白拍子の舞は、「素の舞」なのであって、出雲大社に隷属していた「七道者」の一つ「歩き巫女・歩き白拍子」であった後の出雲の阿国の念仏踊りにも、「素」の要素が多分に含まれているように思われる。

## 「白」が舞踊芸術に与えた影響

これまで考察してきたように、「白」という色彩は、日本の伝統文化や伝統芸能の中で、常にシャーマニズムと深い関係を持ちながら、特別な意味合いを持ち合わせてきたことがわかる。「面白い」とは、顔が白いことだが、太古の昔より、舞手・踊り手は、顔を白く塗った。確かに暗がり顔で顔を明るくさせるためにという理由もあっただろうが、顔を白く塗ることは、既に尋常ではない人間を逸脱した者である。それは神の姿でもあり、それだけで興味を惹く存在であった。これは正に「俳優（わざおき）」の語を表す。なぜなら「俳」という字は、人に非ずと書くことからそれは明らかであろう。また、「楽」という字は、木の柄のある手鈴の形で、これを振って神を楽しませる姿が漢字になったもの（※4）だが、この字の中にある「白」なる人物こそ、「面白い」人物なのであり、それが「白拍子」、そして日本の舞踊文化の始原へと繋がっていったのではないだろうか。

（※1）白川静著『字訓』平凡社・1995

（※2）倉野憲司校注『古事記』岩波書店・1963

（※3）坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晉校注『日本書紀（一）（二）』岩波書店・1994

（※4）白川静著『字統』平凡社・1994